

類別詞言語と非類別詞言語に関する一考察 ：英語とインドネシア語を例に

岩崎 真哉*

A Study of Numeral and Non-Numeral Classifier Languages: With Special Reference to English and Indonesian

Shin-ya Iwasaki*

Abstract

This paper analyzes the characteristics of nouns in English, which is categorized as a non-numeral classifier language, and of classifiers in Indonesian, which is categorized as a numeral classifier language. It is shown that the wholeness of the noun affects the selection of numeral classifiers in Indonesian. Moreover, it will be claimed that Indonesian nouns are construed as more “synthetic” than English ones. This study will help us understand how English and Indonesian construe the category of a noun in terms of individuation and wholeness.

キーワード

類別詞、認知言語学、捉え方（把握）

1. はじめに

本稿では、非類別詞言語である英語と、日本語と同じように類別詞言語であるインドネシア語を取り上げ、認知言語学の観点から分析する。特に、インドネシア語の類別詞 (numeral classifiers) と英語の名詞の全体性に注目し、両言語がどのように名詞を捉えているかを考察する。また、多くの言語では、類別詞は名詞に付加し、名詞の捉え方（把握、construal）に大きく影響されるが、本稿では、一般に類別詞を持たないとされる英語と日本語のように多くの類別詞を持つインドネシア語の名詞を比較・検討し、両者にはどのような特徴があるかを考察するものである¹⁾。

本稿の構成は以下の通りである。2節でインドネシア語とその類別詞の特徴を概観し、

*いわさき しんや：大阪国際大学国際コミュニケーション学部講師（2014.12.8受理）

3節でインドネシア語の類別詞を詳細に分類しているWahyuni (2006) を見る。そして4節で英語の名詞性を考察し、それには捉え方が大きく関わっていると主張する。5節では名詞の個別性と全体性の概念を紹介し、6節でインドネシア語の類別詞がどのように名詞の個別性と全体性に関与しているか具体的に分析する。そして、7節で結語を述べる。

2. インドネシア語とその類別詞

インドネシア語 (Bahasa Indonesia) はムラユ語の標準変種で、オーストロネシア語族に属するとされ、マレー語を起源とする。インドネシア共和国には、200種を超すと言われる言語と種族があり、それにはジャワ語やバリ語が含まれる (亀井・河野・千野 1989)。

インドネシア語の使用人口は、詳しくはよくわからないとされるが、1984年のインドネシア共和国の人口が1億7千万人に達する中で、ムラユ語のいずれかの変種を母語とする人口は、3千万人、またムラユ語を何らかの形で使用する人口は1億数千万人に達すると言われる。大多数のインドネシア語使用者にとっては、インドネシア語は第2、第3以下の言語であるとされ、第1はムラユ語である場合が多いという。ここで注意したいのは、ムラユ語の使用者が多いが、インドネシア語は次のような政治思想の下にあるということである。「インドネシアは多民族が共存する。どの民族が支配してもいけない。どの民族の言語 (地方語) も国語になってはならない。ある民族の言語が国語になれば、その民族が国を支配するからである。インドネシア語は、ムラユ語 (地方語) から生まれた。しかし、もはやムラユ語ではない。すでに国家の言語であり国民の言語である」 (柴田 1997: 35)。

類別詞について、Aikhenvald (2000) によれば、類別詞とは、「名詞の意味的分類を表す言語手段」 (Aikhenvald 2000: 1) とされる。そのうち、インドネシア語や日本語の類別詞に該当する数量類別詞は「助数詞」とも呼ばれ、東アジアから東南アジア、南アジアにかけて広がっている (Aikhenvald 2000: 122)。特に、ジャワ語には名詞類別詞も見られるようである。

例えば、日本語とインドネシア語は名詞の数を表現する時に、(1 a, b) のように主に数字に類別詞をつける。それに対して、英語では、(1 c) のように語形変化を用いる (規則変化は(e)s)。日本語とインドネシア語では、数詞と類別詞が隣接していれば名詞と順番が変わることも可能である。

- (1) a. 彼には子どもが3人いる。
 b. Dia mempunyai tiga orang anak.
 he have three CL children (CL = classifier)
 'He has three children.'
 c. He has three children.
- (2) a. 彼には3人の子どもがいる。
 b. Dia mempunyai anak tiga orang.
 he have children three CL
 'He has three children.'

ここで範疇化について考えてみると、類別詞言語である日本語とインドネシア語の個別数量類別詞の範疇化は図1のように描かれる。

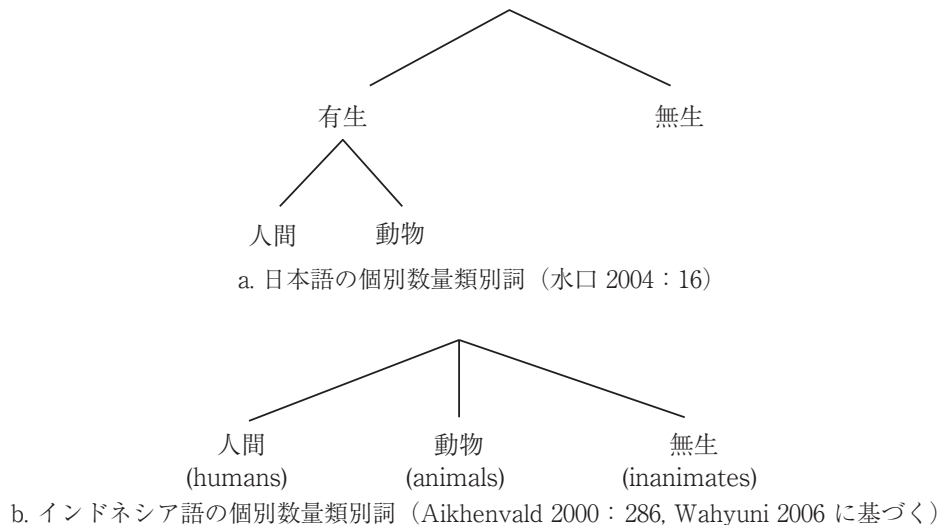


図 1

図1 (a)に示されるように、日本語では有生と無生の2つに分かれるのに対して、インドネシア語では、図1 (b)のように、人間・動物・無生が同じレベルで3つに分かれている。これは、インドネシア語には人間と動物に共通に使われる類別詞がないことで示唆される。日本語とインドネシア語の類別詞において共通な点は、両者ともに人間に対しては1つの類別詞しか持っていないということである (Aikhenvald 2000 : 288)。人間につく類別詞 orang や動物につく ekor は最も安定しているが、特定の類別詞は減少していく傾向がある。例えば、形や機能、物質に基づく無生物につく類別詞はより一般的な buah に取って代わられている (Aikhenvald 2000 : 380)。インドネシア語で特徴的なことは、言語接触があり、それにより類別詞が減ることがあり、例えば、インドネシア語が国語となったあと、ジャワ語と英語の影響で類別詞の数が減っている (Aikhenvald 2000 : 386)。

3. インドネシア語の類別詞類型

Wahyuni (2006) は、水口 (2004) の数量類別詞の意味的な3分類に基づいて、インドネシア語の類別詞を個別類別詞、集合類別詞、計量類別詞の3つの観点から分析している。具体的には、個別類別詞とは、「最小のユニット」、つまり個体一つひとつははっきりしているものを数える類別詞で、名詞ごとにどの類別詞を使えるかが言語ごとに決まっているものである (例えば、日本語の人間を数えるための「人」や動物を数えるための「匹」)。2つ目の集合類別詞とは、「個体はいくつか集まって「最小のユニット」を作る類別詞であ」り、メンバーから作られているグループに焦点がある」ものである (例えば、日本語

の「足」や「列」)。3つ目の計量類別詞とは、「液体や小さい粒、布などを数える場合に使われる類別詞であるが、「最小のユニット」はそれ自体もっていない、と認識され、「量」によって計量される場合に付与される類別詞である」(例えば、日本語の「キロ」や「杯」)(水口 2004: 13-14)。Wahyuni (2006) は、個別類別詞、集合類別詞、計量類別詞それぞれに対して以下の具体例を提示している。

(3)

個別類別詞…人間を示すorang, 動物を示すekor, 無生物を示すbuah (植物、乗り物、建造物、家具、食器や台所道具、地理的な名称、果物、抽象概念、駅や駐車に関する場所), sosok (死んだ人間、悪魔、お化けに対して), batang (丸く長いものに対して), bentuk (装飾品に対して), bidang / petak / tumpak/piring/kapling (地面を数えるのに対して), biji / butir (種子や植物の実、果物に対して), bilah (細く、良く切れる鋭いものに対して), helai / lembar (平たいものや細いものに対して), mata (とがった部分を持つものに対して), laras / pucuk (武器に対して), gulung / kayu (丸めたものに対して), keping (切れ端に対して), ampuk (果実に対して), utas (細長いものに対して), unit (車や機械に対して), kajang (牛車に対して), berkas (光に対して), kaki (傘に対して), kuntum (花に対して), rawut (顔に対して), rawan (網に対して), patah (言葉に対して)

集合類別詞：

- a. 流動的な集まり…kelompok (同質の人間の集まりに対して), regu (ある目的の下に集まった人間の集団), kawanan (人間と動物の集団), gerombolan (悪い行為をする人間), rumpun (植物の群がり),
- b. 総計的な集まり…kodi (20の倍数の物), lusin, gros (12の倍数の物), rim (集められた紙), pak (20の倍数でタバコや紅茶などの箱(袋)), tukal (束ねた糸)
- c. 個別のものを束ねたもの…ikat/ berkas /bundel (束ねた野菜、薪), rangkai (花束), kelindan / rian (束ねた糸), tusuk (sate「肉の串焼き」を数える), bungkus (包んだもの)
- d. 枝分かれましたまとまり…bulir (穀物の枝分かれました部分を数える), gagang (地上に這う植物の軸分かれました部分), tandan (長い茎に付いている実の幹分かれました部分), sisir (バナナの房), tangkai (花、実、葉などがついた枝を数える)
- e. 堆積状に集まったもの…tumpuk /onggok
- f. 層状になったもの…lapis (デザートも対象), susun (整然と積み重ねたもの), baris / deret (列を作ることとするものを表す),
- g. ペアのもの…pasang (二つで一揃いのもの。独立したものが対をなしている場合の

み), *perangkat* (二つ以上のもので一揃いのもの), *setel* (二つで一揃いのもの)

計量類別詞…*carik* (「紙」や「織物」のような平たいもの), *belah* (一对のものの片方に対して), *iris/ kerat/ potong* (全体から切離されたものの一部分), *bait* (詩や歌の全体に対する一部分), *ulas* (みかんの中身の一部分), *penggal* (文の全体に対する一部分)

(Wahyuni 2006 : 103-114)

以上、Wahyuni (2006) によるインドネシア語の類別詞の分類を見たが、本稿では上記の分類を利用し、全体性に注目し分析していく。

4. 英語の名詞性

英語では名詞は、個別化できるか、あるいは有界であるか (ラネカー 2011)、という観点から捉えられる。具体的に次の例を考えてみよう。

- (4) a. They keep cattle.
b. They keep four cows and three bulls.

(久野・高見 2004 : 10)

(4a) の *cattle* は (4b) の *cow* や *bull* で表されるような「牛」の集合体をなす。言い換えると連続体をなし境界がはっきりしていないので、集合名詞と捉えられる。それに対して、(4b) の *cow* や *bull* は単一の個体をなし、境界がはっきりしており個別的であるので可算名詞として捉えられるのである。本稿では、西光 (2004 : 31) が指摘するように、個別化しているものと個別化していないものは、同質のものと異質のものを両端にするスケール上で連続体を成すと考える²⁾。

可算名詞や質量 (集合) 名詞は、本来的には概念的に区別され、文の中でどの用法になるか決定されうる。(5a) の *cat* ((5b) の前半の *cat*) は境界がはっきりしている個別の物体を表すのに対して、(5b) の後半の *cat* は SUV にひかれ、形や構造が破壊され、「質量」としか判断されない *cat* を表す。

- (5) a. I have three cats.
b. After a cat got in the way of our SUV, there was cat all over the driveway.

(ラネカー 2011 : 182)

可算名詞的な意味から質量名詞的な意味への変化は次のように示される。

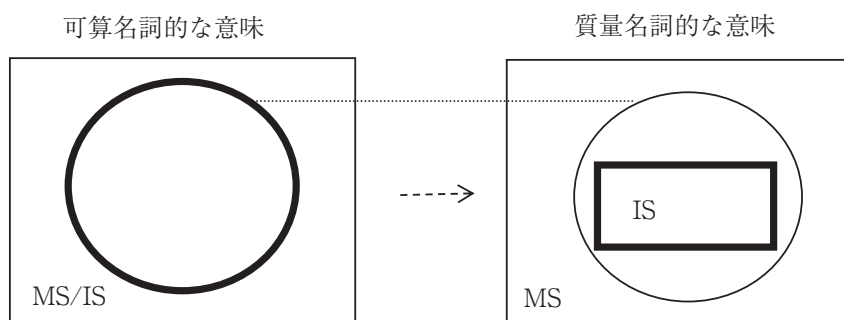


図2. (ラネカー 2011 : 181)

図中のMS (maximal scope) は「最大スコープ」を指し、言語表現が表す最大のドメインのことをいうのに対して、IS (immediate scope) とは「直接スコープ」を指し、一般的な注意が向けられる場所を表す。境界のある、焦点が当たっている (太線) モノに (図2左)、限定的な直接スコープが当てられ、質量名詞的な意味に変化していることが表されている (一部の限定された部分であるため境界づけられない)。

可算名詞の中には、(6) のように単数形である時に、単数形・複数形の動詞両方ともとれるものがある。

(6) The committee is/are considering the matter right now.

しかし、単数形と複数形の動詞を取った時では、意味に微妙な違いがあるとされる。

- (7) a. The committee are wearing their hats.
 b. *The committee is wearing its hat/ their club ties.

(クルーズ 2012 : 335)

(7a) ではcommitteeは委員という個体が別々から成り立っていると捉えられる。それに対して、(7b) では単数の述語であるが、個体に別々に適用されるため不適となる。しかし、(8) のように集合全体 (委員会) に適合される場合は、単数の述語が容認される。

(8) The committee was/ *were formed six months ago.

集合名詞でも以下のように単数と複数の用法がある³⁾。

- (9) a. There was a large audience in the theater.
 b. The audience were deeply impressed.

(山梨 2000 : 76-77)

山梨（2000）の言葉を借りれば、（9a）のaudienceは統合的スキーマで捉えられ、（9b）のaudienceは離散的スキーマで捉えられる。



図3.（山梨 2000：77）

図3（a）の統合的スキーマでは、audienceが一つの塊のように捉えられ、有界的であるため、実線で描かれている。それに対して、図3（b）の離散的スキーマでは、audienceの構成物に焦点が当たっており、それが複数あることが示されている。図3は言い換えると、構成物が「個別的に捉えられるか否か」ということになる。今里（2004）は統語テストを用いて英語の個別性レベルを調査し、英語は個別性レベルを重要視する言語であると結論付けている⁴⁾。

濱田・井上（2011）は英語話者と日本語話者の違いとして、英語話者は統合的スキーマと離散的スキーマの両方が活性化されているのに対して、日本語話者は統合的スキーマによる事態把握が比較的安定して固定化されていると述べている。そのために、日本語では、物体が個別に複数認識されていても統合的スキーマによる把握により、複数を表す形態素が発達しなかったのではないかと考察している。濱田・井上（2011）が指摘しているように、複数を表示する形態素が発達しなかったと言っても、日本語には（10a）のように多くの場合は人間に、時には動物にも付加する「達」「等」「方」で複数を表示したり、（10b）のように同じ名詞を連続させて複数を表す方法がある。

- (10) a. 君達、彼女等、先生方
b. 人人（人々）、花花（花々）、木木（木々）、家家（家々）

興味深いことは、インドネシア語でも（11）のように同じ名詞を連続させて複数を表すことができる。

- (11) a. orang-orang
person-person
「人々」
b. pelajar-pelajar
learner-learner
「生徒たち、学習者たち」

- c. bunga-bunga
flower-flower
「花々」

上記で英語と日本語の比較として、「英語話者は統合的スキーマと離散的スキーマの両方が活性化されているのに対して、日本語話者は統合的スキーマによる事態把握が固定化されている」と述べたが、インドネシア語に当てはめて考えてみると、インドネシア語においても統合的スキーマが離散的スキーマよりも活性化していると考えられる。これは今里(2004)が述べている「類別詞言語における「図地関係の法則」」にも関連していると考えられる。

(12) 類別詞言語における「図地関係の法則」

類別詞言語では、名詞は概念・カテゴリーを指示し、常にこれを「地」と認識し、「図」としての具体的な構成素を個別性レベルに従った各類別詞で具体化して取り出す。

(今里 2004 : 53)

日本語が個別性レベルよりも「図地関係」を重要視しているというのは、統合的スキーマの活性化が進んでいるという見方もできるであろう⁵⁾。

5. 名詞の個別性／全体性

岩崎(2013)では、游・夏(2011)の全体性と個別性の分析に基づいて、クメール語の名詞の全体性と個別性に関する研究を行った。本稿でも全体性を「物体が形状的・機能的に完結しているという性質」と定義し、その方法をインドネシア語の名詞に適用しながら、全体性と個別性を分析する。

游・夏(2011)によれば、中国語の「个 ge」は、例えばリング全体に対しては使用されるが、切られたリングの一部に対しては「块 kuai」が使われるという。リング、石、ケーキは個別性がある物体であるが、全体性という観点からはそれに程度の差がある。丸ごとのリングは、本来の球状で、種子・皮・へたがあり本質的機能を保持しており、全体性が高いと言える。石は、確定した形状がなく、石が集まって全体を構成することもあまり感じられず、全体と部分の明確な区別があるものとは考えられない。ケーキは、誕生日ケーキのような丸いケーキもあれば、切られたケーキもあり、状況により全体性を与えられる。全体性の観点から、本稿で調べる物体は次のように並べられる。

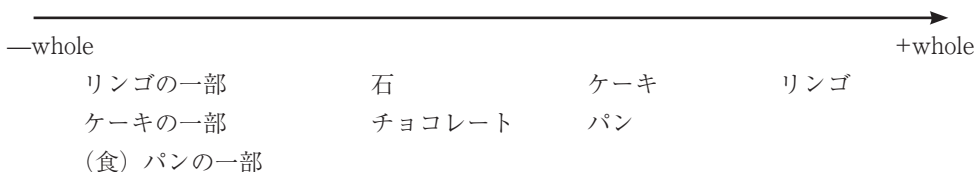


図4. 全体性の度合い

リングは本質的な形状が確定しているので [+whole] と考えられる。人工物に対して、例えば、円形のケーキは全体性が与えられ [+whole] と考えられるが、円形のケーキから切られたケーキの一部は [-whole] と考えられる。(板) チョコレートも同様に人工的に全体性が与えられる。それに対して、石は全体と部分の区別がないので(石はいろんな形状のものがある)、[0 whole] と考えられる。最後に、リングの一部は、「全体からの一部」という印象が強いので [-whole] となる(ケーキの一部は、円形ケーキの一部という印象が弱ければそれ自体で独立しているので [+whole] と考えられる)⁶⁾。

6. 分析とその結果

調査方法

インドネシア語話者に、1枚の写真と1つの描写文を提示し、写真に映っている状況をインドネシア語でどのように言うか尋ねた。

結果

一本のバナナに対しては「果物、果実」を意味する buah が使用された (buah は無生物名詞の類別詞としても使われ、「個」を表す)。

- (13) se- buah pisang
 one CL banana
 「バナナ一本」

切った状態のバナナに対しては、potong が使用された (potong は全体から切り離されたものの一部分を数える類別詞として使用され、「一切れ、一片、一着、一包み」を意味する)。

- (14) se- potong pisang
 one CL banana
 「一切れのバナナ」

バナナ一房を表すには、類別詞は sisir が使われた。

- (15) se- sisir pisang
 one CL banana
 「一房のバナナ」

パンを厚く切った時には buah が使われ、薄く切った時には、potong が使われた。

- (16) se- buah roti
 one CL パン
 「パン一斤」

- (17) se- potong roti
 one CL パン
 「一切れのパン」

丸いデコレーションケーキのようなケーキ1個に対しても buah が使われ、ケーキ一切れに対しては potong が使われた。リンゴ “apel” とチョコレート “cokelat” についても同様である。

(18) se- buah kue
 one CL ケーキ
 「ケーキ1個」

(19) se- potong apel
 one CL ケーキ
 「ケーキ1切れ」

(20) se- buah apel
 one CL リンゴ
 「リンゴ1個」

(21) se- potong apel
 one CL リンゴ
 「リンゴ1切れ」

(22) se- buah cokelat
 one CL チョコレート
 「チョコレート1個」

(23) se- potong cokelat
 one CL チョコレート
 「チョコレート1切れ」

以上より、日本語と同じように、インドネシア語においても類別詞を選ぶ際には、名詞の全体性の概念が重要な役割を果たしていることがわかる。

7. 結語

本稿では、英語の名詞性とインドネシア語の類別詞に焦点を当て、認知言語学の観点から考察した。特に、英語の名詞は統合的にも個別的にも捉えられるのに対して、インドネシア語の名詞は、日本語の名詞と類似して、より統合的に捉えられると主張した。また、インドネシア語の類別詞の選択に関して、名詞の全体性が関与していることを示した。当然、これはインドネシア語話者の出身地や年代に関係するものである。

謝辞

本稿で例文の可否に回答して下さった、インドネシア人インフォーマントに感謝します。

注：

- 1) Allan (1977: 288) が指摘するように、日本語もインドネシア語も類別詞はそれを分類する名詞によって妨げられることのないつながりを形成する。
- 2) 水口 (2009) によれば、英語の無冠詞の複数形は種の読みをもつものに対して、日本語の複数形は種の読みをもたない。
 - (i) a. 英語 Dinosaurus are extinct.
 - b. 日本語 恐竜 (*たち) は絶滅した。

(水口 2009: 29 (一部修正))
- 3) Crystal (1995: 201) は問題となるような名詞として data を挙げている。かつては複数名詞としてだけ使用されていたが、現在では特に計算や科学の分野で単数名詞としてよく使用されると述べている。つまり、(ia) の方が (ib) よりもその分野では使われつつあるようである。もちろんこの用法はまだ確立されたものではなく、また、アメリカ英語の方がイギリス英語よりも見られるようである。
 - (i) a. Much of this data needs to be questioned.
 - b. Many of these data need to be questioned.
- 4) 山梨 (2009) は、統合的スキーマと離散的スキーマの反転の例として、次のようなものも挙げている。
 - (i) a. John returned from the police yesterday. He said they treated him like a child.
 - b. Nobody is guilty until they are proved so.

(山梨 2009: 20)

(ia) の the police は「警察 (署)」を表すが、これは後続の文では they で指示される。また、(ib) の nobody は従属節では複数の they で指示されている。これらのような現象を山梨は「ゲシュタルト変換 (gestalt switch)」と呼ぶ。
- 5) 西光 (2004) が言うように、「数えるためには境界が明確になるなど個別化が十分でなければならない (個別化の条件)」(西光 2004: 31) という前提が必要である。
- 6) 本稿でも Fillmore (1982), Lakoff (1987), 松本 (1991) の研究に代表されるような典型的な意味によって語を記述しようとする立場に立つ。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2000) *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Devices*, Oxford: Oxford University Press.
- Allan, Keith (1977) "Classifiers," *Language* 53, 285-311.
- クルーズ, アラン (片岡宏仁訳) (2012) 『言語における意味: 意味論と語用論』東京: 東京電機大学出版局.
- Crystal, David (1995) *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. (1982) "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis," *Speech, Place and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, ed. by R. J. Jarvella and W. Klein, 31-59, New York: John Wiley & Sons.

- 濱田英人・井上紗葉璃（2011）「日本語話者のモノの認識と類別詞」札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第75号。
- 今里典子（2004）「非類別詞／類別詞言語を決定する要因について」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対照』, 39-57, 東京：くろしお出版。
- 岩崎真哉（2013）「日本語とクメール語の類別詞に関する一考察」『異文化コミュニケーション研究』, 1-12.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1989）『言語学大辞典』東京：三省堂。
- 久野暉・高見健一（2004）『謎解きの英文法—冠詞と名詞』東京：くろしお出版。
- Lakoff, George (1987) *Women Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago.
- ラネカー, ロナルド・W (山梨正明監訳) (2011) 『認知文法論序説』東京：研究社。
- 松本 曜 (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系：原型意味論による分析」『言語研究』99, 82-106.
- 水口志乃扶（2004）「「類別詞」とは何か」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対照』, 3-22, 東京：くろしお出版。
- 水口志乃扶（2009）「類別詞から日本語を考える」『日本語学』Vol. 28, No. 7, 22-31.
- 西光義弘（2004）「類別詞と認知様式の相関に関する理論的考察」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対照』, 23-38, 東京：くろしお出版。
- 柴田紀男（1997）「インドネシア」『月刊言語』Vol. 26, No. 1, 34-37.
- Wahyuni, Sri (2006) 「インドネシア語の類別詞」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』第39巻, 101-118.
- 山梨正明（2000）『認知言語学原理』東京：くろしお出版。
- 山梨正明（2009）『認知構文論：文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店。
- 游韋倫・夏海燕（2011）「日中両言語の類別詞の使用における全体性の影響」『日本言語学会第143回大会予稿集』, 432-437.